

不登校児童生徒への対応事例 5（中学校第 1 学年女子）

～生徒で構成するサポートグループによる組織的な支援～

問題の把握

第 1 学年女子 A は、仲のよい友人である B から些細なことをきっかけに仲間はずれにされた。B の周りの生徒だけでなく、他の学級の生徒からも孤立してしまった。その後、A は学校を休みがちになり、長期休業明けから不登校になった。

対応状況

第 I 期

7 月中旬～9 月中旬

- 実態把握
- 担任による支援

- 担任は、当該生徒及び関係生徒への事実確認を行い、実態把握に努めた。
- 担任は、A が不登校になってから、家庭訪問をはじめ、電話等による連絡を密に行い、登校を促した。
- 担任による働きかけにもかかわらず、A が登校することはなく、また、家庭訪問を行っても A 及び A の保護者に会うこともできなくなった。

第 II 期

9 月下旬～10 月下旬

- 支援方針の検討
- 解決志向アプローチによる保護者への面接
- 組織的な対応（「サポート・グループ・アプローチ」による支援）

- A への支援方針について、担任、管理職、学年所属教員、養護教諭、スクールカウンセラーによる会議をもち、養護教諭を中心とした「サポート・グループ・アプローチ」による支援を行っていくこととした。
- 担任と養護教諭が家庭訪問を行い、母親と※解決志向アプローチによる面接を行った。母親に対し、これまでの養育に対する苦勞等についてねぎらい、称賛するとともに、「A に友達ができ、再登校すること」を目標に設定する。
- 養護教諭は、担任と協力し、A を支援するために、生徒によるサポートグループを構成した。（サポートグループメンバーは A と養護教諭が相談して決定した。）
- サポートグループのメンバーはサポート会議を開き、A への支援の方法や A の状況について話し合った。
- 養護教諭と担任は、A と面談を行い、A の状態をより理解するために、A の状態を 1 から 10 までの 10 段階で評価した。

※「解決志向アプローチ」では、過去の問題や原因には一切ふれず、子どものもっているリソース（資源）を生かし、可能なことや変わりうることに焦点を当てることを大切にしている。

第 III 期

11 月初旬～

- サポートグループによる継続的な支援
- 保健室登校による段階的な支援
- 教室への復帰

- A は保健室登校を始め、休み時間や給食時にはサポートグループのメンバーと一緒に過ごした。
- サポートグループはサポート会議を開き、保健室から教室への復帰に向けて支援の方法を話し合った。その際、サポートグループのメンバーでもある B が A と直接話をするを提案した。
- サポートグループや教職員、所属学級からのアプローチにより、A は教室に復帰することができた。A の教室復帰後、サポートグループは解散した。

不登校の問題を速やかに解消するためのポイント

- ・不登校の問題を担任だけに任せずに、組織的な取組を推進する指導体制をつくること。
- ・不登校生徒の実態を踏まえ、解決のための方針を明確にすること。
- ・保護者の気持ちや考えを十分に尊重し、誠意をもって対応すること。
- ・生徒によるサポートグループ等の支援により、解決に向けた学級の雰囲気醸成すること。